

## DVD 英語教材の日本語補助の効果に関する調査

### A Study on the Effects of Japanese Language Support for Japanese Preschoolers Learning English by DVD

豊田ひろ子

Hiroko TOYODA

東京工科大学

*Tokyo University of Technology*

#### Abstract

This study was carried out to investigate differences in the effects of Japanese language support provided on a DVD for two- to three-year-old Japanese preschoolers, who were learning English for the first time. The Japanese language support did not provide the children with translations but gave them signals for when to repeat key phrases or dance to songs, and attracted their attention to certain things shown on the DVD. Over one week, a group of 13 children watched the DVD with the Japanese language support and another group of 12 children watched it without this support. In both groups, the number of English utterances increased over the week. The children who watched the DVD all in English were at first tense but became relaxed later on. Their pronunciation was slightly better than the other children. They were spontaneously uttering whatever they heard without worrying about meaning. Both groups of children were interested in watching an animated story translated from Japanese into English; they liked its characters and seemed to enjoy the story, which was on the subject of toilet training.

#### Keywords

Japanese Preschoolers, English as a Foreign Language, Language Support

#### 1. はじめに

日本語を習得中の幼児に英語学習は早いのではないかと、という声がある。もし英語学習をさせるのであれば、日本語の補助があった方が、子どもは緊張も混乱もしないし、興味・関心、発達段階に合ったものを与えてあげた方が効果的ではないだろうか、といった意見もある。一方、第二言語習得は、6歳前の最適齢期に開始し、可能な限り自然な当該言語などに浸れる環境で行われると成功する可能性が高まるとする研究者(Long, 2013)がいる。外国語として英語を学習しなければならない日本のような環境の中では、教材や教室の中でしか、子どもは英語に浸れるチャンスがない。日本語の補助は果たして必要なのだろうか。日本語のないオールイングリッシュの教材を使い英語に浸れる環境では、子どもは

不安になるだろうか。この件に関して事例調査を行った。

## 2. 調査概要

英語学習用のDVD教材を、日本語を母語とする2歳～3歳の幼児25名に1週間視聴してもらった。DVD教材のコンテンツは、対象者の認知発達、興味・関心に合ったもので、ネイティブ・スピーカーの音が吹き込まれたオールイングリッシュ教材だった。そのまま英語だけのバージョンと、日本語の補助を付けたバージョンの2種類が制作された。1週間、オールイングリッシュのバージョンを12名に、日本語補助付きのバージョンを13名に視聴してもらい、初日と最終日の子どもの様子を保護者にビデオ撮影してもらった。以下、オールイングリッシュのバージョンを視聴したグループを「補助なしグループ」、日本語補助付きバージョンを視聴したグループを「補助付きグループ」と呼ぶ。

DVD教材には、(株)ベネッセコーポレーションの在宅英語教材「こどもちゃれんじ English ほっぷ」のために過去に制作された7つのコーナーがあった。① 歌：“Twinkle, Twinkle, Little Star”(アニメ・ダンスなし)、② 歌：“Head, Shoulders, Knees and Toes”(実写・ダンスあり)、③ 歌：“Seven Steps”(実写・ダンスあり)、④ 語彙学習(アニメ・チャンツあり)、⑤ 語彙学習(実写・チャンツあり)、⑥ ストーリー (アニメ・お話)、⑦ ストーリー (アニメ・トイレ生活習慣)だった。

日本語の補助には、収録されている英語学習内容の訳ではなく、「一緒に歌おう」「一緒に踊ろう」「何かな」「ジジの家に遊びにきたよ」「できたね」のように、学習支援のための声掛けや、「ーしているね」と状況確認のためのもの、発声を促す「せーの！」という掛け声があった。日本語補助付きバージョンは、オールイングリッシュ教材は編集せずに、日本語を副音声として被せて録音して収録していた。したがって、日本語の補助の有無にかかわらず両方とも収録時間は約15分で、最後の⑦のコーナーには英語の字幕が付いていた。

## 3. データ作成

撮影されたビデオをもとに、モニターごとに、初日の様子と1週間後の様子を観察し記述した。下の5項目に関して点数(最小値0点、最大値3点)をつけた。

- (1) 子どもの態度 初日+1週間後：(緊張がある：0点、少し緊張がある：1点、楽しんでる：2点、とても楽しんでる：3点)
- (2) 子どもの英語の発声 初日+1週間後：(無言：0点、少し発声している：1点、発声している：2点、よく発声している：3点)
- (3) 子どもの日本語の発声 初日+1週間後：(無言：0点、少し発生している：1点、発声している：2点、よく発声している：3点)
- (4) 保護者の日本語の発声：(発声がない：0点、少し発声している：1点、発声している：2点、よく発声している：3点)
- (5) 保護者の英語の発声：(発声がない：0点、少し発声している：1点、発声している：2点、よく発声している：3点)

## 4. 結果

### 4.1 子どもの態度

初日は、「補助付きグループ」の子どもたちの方がリラックスしていた。「補助なしグループ」は無言でじっと画像を見ているモニターが多かった。1週間のDVD視聴後、両グループとも、平均値が2点(最大値3点)を超える数値に到達した。1週間後には、両グループとも英語のDVDを楽しんでいたことがわかる。態度の変化の数値は、「補助付きグループ」が.61、「補助なしグループ」が.75で、後者の変化に有意差があった(P値>.01)。「補助なしグループ」には初日緊張の様子が観察されたが、1週間後には「補助付きグループ」と並んだ。「補助付きグループ」の変化には有意差はなかった。

表1 子どもの態度の変化：補助付きグループと補助なしグループの比較

(単位：点，最小値：0点，最大値：3点)

	補助付きグループ (13名)	補助なしグループ (12名)
子どもの態度(前):初日	1.62	1.42
子どもの態度(後):1週間後	2.23	2.17
変化の差	0.61	0.75

1週間後には、両グループとも、DVDの冒頭から立っていて、英語で歌う体勢になっている子どもたちがほとんどであった。「英語をするぞ!」という意気込みが感じられた。両方とも、初日に、ただ座って、DVDの映像を凝視していた様子とはまるで異なり、緊張が感じられないどころか積極的にも見えた。

しかしながら、1週間後、「補助付きグループ」の中に、まったく集中できない子どもが2人いた。ビデオ撮影のときに、たまたま気分や体調が優れなかったためなのか、あるいは、日本語の補助があったために、1週間のうちに、特に英語に興味を持つ必要を感じなくなってしまったなどの理由が考えられる。

また、「補助なしグループ」の中には、10月生まれの男の子で、拒否反応の激しい子どもがいた。初日に、既に英語を真似る様子も発声もあったのだが、途中から「おちち、おちち」と母親に抱っこをせがみ、子ども返りの逃避行為が観察された。1週間後も、途中から「おちち、おちち」を連発し、英語の発声はなかった。日本語で生活しているため、英語だけ聞かされると、不安になる子どももいるのかもしれない。たまたま、英語に限らず、新しいものに対して拒否反応を示し、子ども返りしてしまうような何らかの理由があった可能性もある。

両グループとも、最初は「しまじろうがない」「いやだ」など緊張した態度の子どもたちが数名いたが、保護者が「でも見てみよう」と見ることを促す声掛けをしてDVDを見せ続けたら、たいてい途中から集中して見始めて、最後は「もういっかい(見たい)」などとコメントした。両グループとも、前半の歌で張り切りすぎて、後半疲れが出てしまったモニターもいた。幼い彼らは、集中力が切れると、直ちにおもちゃなど他のものに意識が向き、カメラや保護者に近づくことがあった。普段聞き慣れていない英語を聞き続けるという作業は、結構、頭を使い疲労を感じるのかもしれない。英語にさらされる時間が長くなると集中力が持たないようだ。

DVDを使った英語教材を使いこなすには、子どもに英語を聞き続けられる集中力が必要であるように感じた。また、わくわくさせるようなコーナーと共に、リラックスして見られる息抜きのようなコーナーを設けてバランスを取ることが大事であるように感じた。

## 4.2 子どもの英語の発声

### 4.2.1 量的な変化

「補助付きグループ」も「補助なしグループ」も初日の英語の発声は1点(最大値3点)を切っていた。つまり、両グループとも、子どもたちは無言で画面を凝視していて、英語の発声はほとんど見られなかった。発声があったのは、保護者がDVDの英語を繰り返して聞かせ、子どもがその肉声を聞き取って繰り返す場合や、カタカナ語で「ライオン」と言ったのがたまたま英語の音に似ているといった場合だった。

表2 子どもの英語の発声の変化：補助付きグループと補助なしグループの比較

(単位：点，最小値：0点，最大値：3点)

	補助付きグループ (13名)	補助なしグループ (12名)
子どもの英語の発声(前): 初日	0.38	0.25
子どもの英語の発声(後): 1週間後	1.92	2.00
変化の差	1.54	1.75

例外的にはあるが、「補助付きグループ」の方で、「せーの！」の掛け声に合わせて、英語を真似て発声した子どもがいた。また、「補助なしグループ」の方でも、「せーの！」の掛け声がなくとも、自ら音声を聞き取って英語を真似する子どもがいた。

「補助付きグループ」の方が「補助なしグループ」よりも、初日の英語で若干発声があった。「補助付きグループ」は、初日から、子どもたち同様、保護者たちもリラックスしていたので、時折保護者の肉声を聞いて子どもたちが英語を発声していた。しかし、1週間後の英語の発声では、「補助付きグループ」は1.92点(最大値3点)、「補助なしグループ」が2.00点(最大値3点)と、両グループとも比較的発声するようになっていた。変化に関しては、「補助付きグループ」が1.54(最大値3点)に対して、「補助なしグループ」の方が1.75(最大値3点)で、両グループとも英語の発声の変化に有意差があった(P値>.01)。日本語があると、親子ともにスムーズに教材に取り組めるが、日本語がなくとも、1週間視聴を続ければ、子どもは英語に慣れて発声し始めるようだ。

### 4.2.2 質的な変化

子どもの英語の発声を量的に見ると、両グループ間で1週間後の発声量にほとんど差が見られなかった。しかし、質的にその内容は異なっていることが観察された。

「補助付きグループ」の子どもたちは、初日も1週間後も、概ね単語の発声が多かった。1週間後、大半が英語で「数字」が言えるようになり、“Seven Steps”を歌えるようになっていた。「せーの」で誘導された単語も発声していた。その他、チャンツや歌のリフレインを歌うこともあった。しかし、数字を除いて、全体的に発音があいまいだった。

「補助なしグループ」の子どもたちは、日本語補助付きバージョンの DVD で「せーの！」の掛け声があるところよりも、子どもたち自身が映像や声のインパクトを感じたところで、自由気ままに発声をしている様子が観察された。例えば、ダンサーの「Next!」という掛け声、キャラクターが乗り物に乗って言う「Let's go! Let's go!」というチャンツ、トイレちゃんというキャラクターが顔を向けて発する「I'm ready for you.」というセリフなどである。そして、発音も比較的しっかりしていた。

「補助なしグループ」でも「補助付きグループ」でも、発声の多かった子どもたちは、単語も文も、間奏も、何もかも真似して言っている印象だった。日本語の掛け声すらも真似してしまう。英語に関して言えば、単語を超えた、保護者も発声できないような、まとまった一連の英語を、聞いたまま真似して発声することができていた。しかも、意味を気にせず真似していた。つまり、意味がわからなくても構わない様子だった。例えば、「補助付きグループ」に英語をたくさん発声している女の子がいたが、「I'm ready for you.ってなにのこと？」とつぶやいていた。

これらのことから、英語教材の DVD には、日本語が入らない方が、子どもたちは英語をじっくり聞けて、より多くの英語をより正確に発声する可能性があるように思われる。その反面、英語だけだと拒否反応を起こす場合や、意味にこだわらないとはいえ、慣れない英語をじっくり聞き続けると疲労が生じて集中力が途切れてしまう場合もある。

日本語が入ると、英語の発音がおおまかになるようだった。日本語で思わず発声してしまう様子も観察された。つまり、動物の名前を英語で言わせようとして、DVD から「せーの！」と日本語で声を掛けると、「せーの！」自体が日本語なので、視覚的に動物の絵が目に入ってくると、子どもが「らいおん!」「しまま!」と日本語で発声することがあった。日本語が急速に発達しているからこそ、優勢な日本語で叫んでしまうのかもしれない。日本語を使うことで、学習者の不安は軽減されるが、英語教材が日本語教材として使われることもあることがわかった。

## 5. 保護者の日本語の発声と英語の発声

「補助付きグループ」の子どもの保護者の方が、日本語・英語の発声が多く、雑談も多かった。保護者は日本語の声掛けの支援を活用し、DVD に収録されている声掛けを自分の肉声で繰り返して子どもに聞かせていた。「せーの！」のタイミングで英語の発声をしていたのは、子どもではなくむしろ保護者だった。子どもは「せーの！」と声掛けをされても、なかなかタイミングよく発声できない様子だった。「せーの！」は、子ども向けに入れられた声掛けだが、実際には、保護者が子どもを支援する上で効果があるように感じられた。

例えば、「補助付きグループ」のある男の子の保護者は、最初から最後まで日本語で解説を続けていた。英語教材だったが、日本語の使用に躊躇がない様子だった。子どもは英語、日本語にかかわらず発声するチャンスがなかった。実際のところ、英語の発声はまったくなかった。この子はトイレちゃんのコーナーが気に入っていたので、何度もこのコーナーを見ていた。保護者も最後は、実際にトイレに入るところまでもビデオ撮影してくれていた。しかし、ここでも子どもの英語の発声はまったくなかった。しかし、親子とも楽しんで活動していた。

表3 保護者の日本語の発声と英語の発声：補助付きグループと補助なしグループの比較

(単位：点，最小値：0点，最大値：3点)

	補助付きグループ (13名)	補助なしグループ (12名)
保護者の日本語の発声 (初日と1週間後の平均値)	1.85	1.33
保護者の英語の発声 (初日と1週間後の平均値)	1.31	1.00

一方、「補助なしグループ」の子どもの保護者は、日本語の発声も英語の発声もあまりなかった。しかし、DVDを再生している最中に、「何だろう？」と興味を示してみせたり、子どもの頑張り振りを「上手ね」と褒めたり、子どもが親に話しかけてくるときに返事するくらいでも、子どもが発声する様子が観察された。

## 6. 子どもの日本語の発声と英語の発声

子どもの日本語の発声を見ると、「補助なしグループ」の子どもたちの方が、「補助付きグループ」の子どもたちよりも若干多めだったが有意差はなかった。英語の発声も両グループの間で有意差はなかった。「補助なしグループ」の方は、教材から流れてくる音がすべて英語なので、子どもたちが日本語で発声しても、日本語の発声量が多いと感じられなかった。上手い具合に、子どもが英語に浸っていた。

一方、「補助付きグループ」の子どもたちは、日本語の発声が少なめだった。理由のひとつは、先述したように、保護者が子ども以上に日本語を使っていたことが挙げられるかもしれない。つまり、保護者が日本語でしょっちゅう話しかけるので、子どもが聞く側に回った可能性がある。

「補助付きグループ」の子どもで、英語の発声が多かった男の子の事例は、子どもを支援していたお父さんの日本語の声掛けが、短く軽快でタイミングが良く興味深かった。父親が「できるじゃん」「何でしょう？」と声掛けをすると、子どもが気持ちよく反応して英語で発声するようなやりとりが成り立っていた。子どもは「せーの」という掛け声を聞いて、英語で「It's a lion.」とタイミングよく発声できていたし、声掛けを促されていない「バイバイ」「I did it!」まで、自らジェスチャーを付けて発声することができていた。英語と笑顔で、父親に反応を返し、日本語の発声はまったくなかった。調査時、既に3歳になっており、グループの中では年上だった。3歳くらいになると、保護者の日本語を上手に活用して、英語の学習を進められるのかもしれない。

一方、「補助なしグループ」で英語の発声が多かった男の子の事例では、日本語の発声に興味深かった。この子の日本語の発声は自分の思考のつぶやきだった。例えば、初日に「ジジがめがねをかけているから、おかあさんににている」、1週間後に「トイレちゃん、かわいいから、しまじろうはおしっこしないほうがいい」など、英語の教材の内容に意識が向いていると思われるコメントがあった。日本語で自分から親に話しかけているが、保護者の方では短く返事をするためだけに日本語が使われており、保護者の日本語を子どもが聞かされ続けることはなかった。子どもは英語を聞いていたし、英語をたくさん発声していた。この

子ども、調査時3歳で、他のモニターに比べて落ち着いていた。自分が考えていることを日本語でつぶやけるほどになると、英語に限らず、落ち着いて学習に取り組めるようになるのかもしれない。

表4 子どもの日本語の発声と英語の発声：補助付きグループと補助なしグループの比較

(単位：点、最小値：0点、最大値：3点)

	補助付きグループ (13名)	補助なしグループ (12名)
子どもの日本語の発声(初日と1週間後の平均値)	1.23	1.67
子どもの英語の発声(初日と1週間後の平均値)	1.15	1.13

最後に、初日「ガーガーガー」と言いながら、英語の歌のリズムを取っていた「補助付きグループ」の男の子の事例にも言及しておきたい。「ガーガーガー」は日本語とも英語とも分類しがたい発声だった。しかも、腕でリズムを取っていた。そして、1週間後、この男の子は、最も英語の発声の多いモニターの中の1人となり、特に英語の歌を上手に歌えるようになっていた。他に、鼻歌を歌う子どもたちもいた。子どもたちは最初から英語ではっきりと歌わない、歌えないが、曲を鼻歌で口ずさんでいると、英語の発声が増え始める様子が見られた。子どもたちは、歌教材が好きだし、曲を聞くと体が自然に動いてしまうようなところがある。しかし、英語ですぐに歌が歌えるようになるわけではない。特に、踊りを伴う歌は難しく、踊りに集中していると動くだけで精一杯になってしまっ歌えなくなることがあった。「ガーガーガー」や鼻歌は、英語で歌う練習法のひとつかもしれない。「鼻歌を歌おう」と声掛けがあったわけでもないのに、幼い子どもたちが工夫していることに驚かされる。教材に出てくるチャンツや歌はいつも完成形が多いが、曲を鼻歌で歌う、体でリズムを取る、チャンツを少しずつリズムカルに発声するなど、チャンツや歌を発声できるようになる発展途上の段階の支援も実は重要かもしれない。

## 7. まとめ

1週間という短期間であったが、オールイングリッシュのDVD教材を使用した子どもたちは、初日に若干の緊張が見られたものの、連日視聴した結果、日本語の補助が付いていた子どもたち同様、概ね英語教材を楽しみ伸び伸びと学習している様子が見えかけた。英語だけに浸っていた方が、発音が良い印象があった。英語の発声は、自分が好きな句や文を自由に発声している様子だった。

一方、日本語の補助があると、初日から子どもたちはリラックスしていたが、1週間の間に興味が減退してしまう様子が若干見えかけた。意外だったのは、子どもの学習支援を助けるために仕込まれた日本語の補助が、保護者の日本語の発声を促していたことだ。保護者が日本語を話すぎて、子どもが発声できない場合もあった。補助の日本語は、保護者がいないときに、保護者の声の代わりになってくれるものとして使用されるべきものなのかもしれない。保護者の支援として効果的なのは、子どもに英語を肉声で聞かせて、子どもの英語の発声を促すことや、子どもの思考を伴うつぶやきに日本語や相槌で反応を返すことのように思われる。

今回の調査で使ったDVDは、子どもの関心・興味、認知発達に合った内容の英語教材だったので、1週間という短い期間で、英語を習ったことがない幼児でも、英語に慣れ親しむことができたのだらうと思われる。音声的に、歌やチャンツなど、ネイティブの生き生きとした声が収録され、視覚的に、実写もアニメーションもある教材だったので、英語学習に興味を持ちやすかったのだと思われる。

さらに、最後のコーナーにあったアニメーション教材はトイレトレーニングのための生活習慣に関する日本語教材が英語に訳されたものだったが、子どもたちは、日本語の補助の有無にかかわらず、興味を持って視聴し英語を発声していた。この事実は、英語学習教材のコンテンツを開発する上で重要である。子どもたちは、自分が興味を持っていることは、多少英語がわからなくても学ぼうとするし、そこに英語学習が生じるということ浮き彫りにしていると思われるからである。通常、子ども向けの日本の英語学習教材では、英単語や英会話表現が学習項目として扱われている。日本語で既に習っている単語や会話表現の英語版を教えることが行われている。その背後には、日本語にない英語独特の文法的な特徴である多様な主語、三人称単数現在の形態素 *-s*、複数形の形態素 *-s*、動詞の過去形の形態素、語順などに子どもがさらされると混乱する、周りの保護者もケアをしきれない、といった心配があるようだ。しかし、英語圏の子どもたちは3歳前までに英語の言葉としての文法、統語的な要素を習得するという (Thal & Bates, 1990)。日本人の幼児が、これらの要素が削除された加工された英語材料を聞き続けて学習を進めたらどうなるだろう。英語の音声に触れることはできるが、英語の言葉としての構造を体感することはできないだろう。一方、例えば、日本人の子ども向けに作られたお話のアニメーションを英訳し、英語教材として与えることができれば、子どもは、より自然な「ありのままの英語」に触れることができ、英語という言葉そのものを学ぶことができるのではないだろうか。日本人の子ども向けの認知学習教材であれば、発達段階に合っているし、日本由来のものなので、英語圏の教材に特有な文化的な要素やコミュニケーション・スタイルも一緒に学ばなければならないという負荷もかからない。

外国語として英語を習う日本のような環境では、豊富なインプットを確保することが難しい。インプットが限られているため、日本語との比較対照において、効率よく英語学習が進むように、英語を加工することも一理あるだろう。しかし、その一方で、自然な姿の英語を与え、英語の言葉そのものを子どもに体感させることも必要なのではないか。早期学習者は、自然環境では総合的に第二言語能力がネイティブライクになると言われている。しかし、外国語として英語を学ぶ日本人英語学習者の場合、早期学習者が、後に英語を学び始めた者たちに文法面の能力で追いつかれているという報告もある (Larson-Hall, 2008)。日本語の補助がなくても、英語教材に取り組める子どもたちの姿を見ていると、認知発達のコンテンツの内容が合っているかどうかの確認をした上で、英語の加工は適度にとどめ、「ありのままの英語」に触れさせることも行った方が、早期学習の効果があるように思える。

#### 参考文献

Larson-Hall, J. (2008). Weighing the benefits of studying a foreign language at a younger starting age in a minimal input situation. *Second Language Research*, 24



(1), 35-63.

Long, M. (2013). Maturation constraints on child and adult SLA. In G. Granena & M. Long (Eds.), *Language learning & language teaching 35: Sensitive periods, language aptitude, and ultimate L2 attainment* (pp.3-41). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Thal, D., & Bates, E. (1990). Continuity and variation in early language development. In J. Colombo & J. Fagen (Eds.), *Individual differences in infancy: Reliability, stability, and prediction*. Hillsdale, NJ: Laurence Erlbaum.